

記念誌の刊行にあたって

藤 垣 芳 文

鈴木紘二先生と西藤洋先生は、2009年3月に退職を迎えられた後も引き続き成蹊大学特別任用教授として本学の教育研究活動に従事して来られましたが、両先生の特別任用教授としての任期は2012年3月末をもって満了となり、これを期に両先生は本学部専任教員の職から離れられることとなりました。

鈴木先生、西藤先生が、ともにお元気で定年を迎えられましたことを心よりお喜び申し上げます。両先生には、長年にわたって、本学部の発展のために様々な面で多大な貢献を頂きました。定年制のため仕方ないことと諦めねばなりません、まだまだお元気な両先生が本学を去られますことは痛惜に耐え得ないところであります。本学から離れられた後も、現役の研究者として、ますますご活躍下さることを期待しております。ここに改めて両先生に深く感謝するとともに、本誌を両先生の退職記念号として捧げたいと思います。

鈴木先生は、東京外国語大学大学院外国語学研究科を修了後、1968年に本学部専任講師として就任され、1972年には助教授に、そして1981年には教授に昇任されました。2009年からは成蹊大学特別任用教授を3年間勤められ、そしてこのたびのご退職となりました。この間、本学部においては、基礎演習や英語の授業を通して、大変熱心に学生の教育にあたっていただきました。就任中、鈴木先生は、経済学部の一般教養主任、図書館委員等を歴任され、本学の発展と教育の振興に大きく貢献されるとともに、学部の運営にも尽力されました。

鈴木先生は、本学就任時より大学英語教育学会に所属され、数々の研究論文や書物を出版されると同時に、同学会の企画委員等の役割を担うことを通して、日本の大学英語教育全般に貢献して来られました。また、文化や芸術にも深い学識とセンスをお持ちになり、絵画、音楽、日本の和歌や短歌をも含めた古今東西の詩歌などをテーマに、高雅で見識ある多彩なエッセイを著しておられます。

専任教員である最後の年に執筆された『マザー・グースの謎を解く 伝承童謡の詩学』は、鈴木先生が在職中に書き続けてこられたこれらの著作のうち、共通するテーマで書かれたものを一冊の書物としてまとめられたもので、先生にとって、そしてわれわれ経済学部の同僚にとっても、記念碑的というべき著作です。

西藤先生は、東京大学大学院経済学研究科を修了され、その後、日本経済研究センターに研究員として赴任された後、1973年、本学部専任講師に就任されました。その後1976年には助教授に、そして1983年には教授に昇任されました。鈴木先生と同様、2009年4月から2012年3月までの3年間にわたって成蹊大学特別任用教授を勤められ、このたびのご退職となりました。

この間、西藤先生は、ミクロ経済学、公共経済学、法と経済など、経済学基礎理論ならびに応用科目、ご自身の研究を踏まえた社会思想史・科学思想史に関する特殊講義、さらにゼミなど、幅広い授業科目を担当され、大変熱心に経済学部の学生の教育にあたってこられました。

就任中、西藤先生は、経済学科主任、大学評議員、学園評議員、大学図書館長等の要職を歴任され、経済学部、成蹊大学、成蹊学園の発展と運営に尽くされました。とりわけ、2006年に開設となった大学情報図書館では、初代館長として、インターネット時代の図書館像の確立、その実現に向けての基盤作りに、努力を惜しまれませんでした。

学術面では、もともとご専門の労働経済学と公共経済学から始めながら、次第に研究領域を広められ、ここ十数年間においては、緻密な文献学的アプローチのもとに、科学思想史、社会思想史の分野にまで研究を進めて来られました。鈴木先生と同様に、西藤先生も本学を去る日付を狙ったかのように、在職中の研究成果をまとめ上げて一冊の研究成書『枢機卿ペラルミーノの手紙 科学思想史への一つの扉』として上梓されました。現役の教育研究者として大学に残るわれわれにとっては、まさに「手本」とすべき学者の在り方を、お二人の先生にはお示しいただいたと受け止めております。

成蹊大学経済学部は、旧政治経済学部を母体として1968年に創設されました。その後、本学部は組織改編やカリキュラム改革を繰り返し、その効果があって、少なくとも今日にいたるまではその社会的評価を維持することに成功してきたといえるかと思えます。

鈴木先生と西藤先生は、創設間もない頃に本学部専任教員として就任され、その後に行われたこれらのすべての改革を、あるいは自ら立案し、あるいは自ら遂行し、そして、その成果の全容をつぶさに見て来られた先生です。本学部創設から44年が過ぎ、そうした豊かな経験と知識を有しておられる先生がたは、次々と定年等で本学部を去っていかれました。そしてこの度は、そうした世代の殿を務めておられた鈴木先生と西藤先生までが、本学部を去っていかれます。

後任には若い優秀な力が加わっています。これら若手とともに専任教員が一丸になって立ち向かわなければならない状況が、なおも私たちの目の前に広がっています。そう思うにつけ、鈴木先生、西藤先生がこれまでに果たして来られた功績の大きさ、私たちが両先生から

受けた恩恵の大きさに、思いが至ります。痛惜の感も募ります。今後ともこれまでと変わらぬ私たちへの叱咤勉励をお願い申し上げるとともに、両先生の益々のご健勝と一層のご活躍を心より祈念する次第であります。